

図画工作科指導法における学びの振り返りについての考察

五十嵐 史 帆*・阿 部 靖 子**

(平成29年3月13日受付；平成29年5月2日受理)

要 旨

教員養成課程における各教科初等指導法は、教育実習で行う授業と直接結びついているだけでなく、実際に教員となった時に授業を行うために必要なことを学ぶための重要な科目である。しかし、授業時数や授業規模などから考えても十分な指導を行うことが難しく、学生が自分で学んでいくための基礎的内容について学ぶことを目指している。特に図画工作科の場合は、一つひとつの教材・教具、技術・技法などを学生自身が身に付ける必要性和それを指導できる能力をともに育てる必要があり、学生一人ひとりのレディネスに大きな差があることが授業を難しくしている。

本研究では、このような実態を踏まえ、図画工作科指導法の授業で、学生が自己を振り返りながら自己の目指す教師としての在り方に近づいていくための授業の在り方について検討した。具体的には、実際の授業の中で三つの方法で振り返りを行い、その過程で学生自身が美術についての意識を変化させたり、教師としての自覚に繋がったり、さらに、学生自身の生活に変化を起こしたりするような振り返りの方法を試みた。その結果、学生の意識が変わり、教師としての自覚や態度を育てることに繋がったと考えられた。

KEY WORDS

Arts and Crafts 図画工作, teacher training courses 教員養成課程, teaching method 指導法, reflection 振り返り

1 はじめに

教員養成課程においては、教科に関する科目と各教科の指導法が免許取得に関わる重要な科目として位置づけられ、特に小学校教員養成課程においては、すべての教科に関して指導法の授業を受講することとなる。それぞれの教員養成課程において状況は異なるものの、各教科に関する科目2単位と教科の指導法2単位の履修で、実際の教育現場でその教科をすぐに教えることができるまで全員が到達できるか、疑問である。

上越教育大学の教育課程においても、小学校教員養成課程に在籍する約160名の学生を2クラスに分け、1クラス約80名で授業が実施されている。美術に関わる表現や鑑賞について学生自身の資質を高める内容を盛り込むことは難しく、その部分については学部1年次に受講する教科に関する科目(「図画工作」)の中で習得することとなっている。また、図画工作科指導法の授業において目標とするところは、図画工作科教育の基礎的内容の理解と、教材・指導などの実践的内容の理解である。しかし、学生の美術についての経験や受けてきた美術教育には大きな差が生じており、彼らの経験をもとに図画工作科教育について学ぶことは困難な状況となっている。そこで、学生一人ひとりの美術に対する見方・考え方を広げ、深め、さらに、学校教育における美術教科特有の見方・考え方を学び、その指導の在り方を理解・実践できるようこれまで授業内容を検討してきた。

そして本年度は、「振り返り」を系統的に実施することにより、さらに学生の学びが充実したものになるのではないかと考え、本実践を行った。具体的には、授業の中に三つの振り返りを設定し、それらの振り返りを通して学生がどのように変容していったか見取りながら、成果と在り方について考察し、今後の授業に活かすことを目的とするものである。

2 図画工作科指導法の授業概要と振り返りについて

2.1 「図画工作科指導法」と他の授業との関係

本学では教員への適性理解と確かな自覚を促すカリキュラム改革や、全国初の分離方式の教育実習の導入等、抜本的な改革を重ねてきた。これらの改善をふまえ、平成19年度には卒業時と各学年で習得すべき教育実践力の基準を明示する上越教育大学のスタンダードや教育実習ルーブリックが作成された。また、「先導的大学改革推進委託事業」

*芸術・体育教育学系

(22-23年度)において「教科に関する科目」と「教職に関する科目」の関連性と統合・再編の在り方を探ることが試みられ、教員個人とコース全体の両面から授業改善を行い、学生が身につけるべき知識、態度、能力等を明らかにする諸研究を進めた。

美術コースにおいても、これらの改革の中で「図画工作・美術」の教科の特性を踏まえ、その学びの本質と教師としての指導のあり方を学び、学生から教員になっていく過程を念頭に、学部1年次必修「図画工作」、3年次必修「図画工作科指導法」、4年次選択「教職実践演習」等、一連の授業の関係を確認し、段階的に身につけさせたい力とそのための支援の在り方を検討してきた¹⁾。

2. 2 「図画工作科指導法」授業概要

本授業では、「図画工作科の成立過程、目標と構造、内容構成、学習形態などを学び、図画工作・美術教育の特質を歴史的かつ構造的にとらえてゆく。具体的には、教科内容の教材化、指導法について、美術科の実践的研究の基礎的事項の理解を目指す」ことをねらいとして授業を展開している。

授業15回の内容は、表1の通りである。主に、自分の頭や身体を使って表現・鑑賞する活動を通して自らがつくる喜びを感じるとともに子どもたちの感じ方、考え方に重ね合わせる体験と、学習指導要領の理解や指導計画・指導案の作成、学外実地指導講師の経験を元にした講義等、9月の初等教育実習に備えた実践的な演習という、二つの内容に分けられる。授業期間の中盤には1週間の小学校観察実習、後半になると実習に向けた指導が始まることもあり、学生が、教えてもらう側から、指導する側に意識や視点が変化していく様子が、レポートや課題から伺える授業でもある。

回	テーマ	持ち物・服装・その他
1	オリエンテーション、学習指導要領1（図画工作科の構造と内容）	指導要領解説（以後毎回持参）
2	学習指導要領2（改訂の経緯 他）	
3	教材と用具1 表現・描く活動（スケッチ、鉛筆）	指定の白ファイル（以後毎回持参） 鉛筆・ボールペン
4	子どもの造形能力の発達について	
5	教材と用具2 表現・つくる活動（帽子づくり）	はさみ・のり、雑誌、チラシなど
6	教材と用具3 表現・造形あそびをする活動	動きやすい服装
—	【小学校観察実習】	（観察実習5.23～27）
7	教材と用具4 鑑賞・みではなす活動（グループ鑑賞）	
8	教材と用具5 表現・つくる活動（織りもの）	段ボール（A4サイズ程度）、はさみ
9	ポートフォリオの作成 （「図画工作」、「図画工作科指導法」の振り返り）	「図画工作」のスケッチブック はさみ、のり、2穴パンチ
10	年間カリキュラムと指導計画について	
11	学習指導案と評価について	
12	学外講師の講義（表現領域の指導）	水彩絵の具一式
13	グループワーク（振り返りとこれからの課題）	（ポートフォリオ提出）
14	学外講師の講義（鑑賞領域の指導）	
15	まとめ（授業評価・提出物返却）	

表1 図画工作科指導法の授業内容（2016）

各回の内容は主に次のようになっている。オリエンテーションでは、授業のねらい、内容全般や振り返りに向けての準備（持ち物や実践等の記録の取り方など）、授業の評価等について説明を行う。1～3回の授業では、図画工作・美術科の構造や内容について、例えば、内容は「図画（絵）」と「工作」ではなく、「表現」（描くこと、つくること）と「鑑賞」（みること）である事など、学習指導要領をテキストに講義形式で行う。また、簡単な歴史や文言解説、子どもの作品の鑑賞や造形の特徴などについても触れ、小学校図画工作科の概観を理解する。4～8回の授業では、「教材と用具」として、「スケッチ」「造形あそび」「紙や糸を使った工作」「グループによる鑑賞」などを実際に体験する。この際、作品そのものではなく、「描くこと」「切ること」「見ること」「話すこと」など、行為や活動における学びに着目するよう課題やテーマを工夫し、学びの結果として作品が出来上がることを理解させるようにしている。また、ここでは用具や材料、技法についての知識を得ることも重要ではあるが、それ以上に、「描く行為」であっても、目的や支援の仕方（用具や材料）や声かけによって、プロセスも結果（作品）も変化し、評価も変わるこ

とを理解することによって、教材化や指導の際の視点を得ることが真のねらいとなる。10～11回の授業では、年間指導計画と指導案の作成を行う。教科書や事例を見ながらどのような題材があるかを理解するとともに、具体的に1年間あるいは2年間の題材の配置を考え、指導案を作成して具体的な評価について学ぶ。12～14回の授業では、学外実地指導講師から実際の現場での話を聞き、児童や学校の実態や図画工作科の現状を理解する。

前半は、実技を通して、何を思ったか、感じたか、ということを意識させる。そして、それがどのような学びになっているかということを、実体験の中から自ら考えるような授業内容にしている。後半（特に初等観察実習の後）は、学生の意識が変わり、教師として図工の授業をどのように作っていくのか、児童をどのように支援していくのかという、問題意識が強くなる。したがって、これまでの自らの学びを俯瞰し、教員としての実務的な能力とも結びつけ、3年次後期、4年次に向けての自らの過ごし方を考えるよう指導している。

2. 3 振り返りの意義と本実践における方法の検討

現行の学習指導要領（平成20年改訂）において、教育課程実施上の配慮事項に「学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動」が特に新たに追加され、小・中学校では積極的な取り組みがなされてきた。大学の授業においても、授業の終わりに様々な形で振り返りを行っていると思われる。しかし、学習指導要領に示されている「見通し・振り返り」は、「生きる力」を育む様々な資質・能力と関連させて考えられており、各教科におけるとらえ方も多様なものとなっている。その中で、本実践が目指す振り返りは、見通しと結びついたものというより、今までの自己の体験や授業での学びの意味を振り返ることに重点を置き、振り返りで得た自身の気づきや意味を学生自身の次の学びへ繋げていくものである。つまり、問題解決型の見通しと振り返りが順々に学びを深めていくような方法というより、むしろその授業で学んだことを基にした学生のメタ認知に関わる振り返りを重視するものとなる。また、見通しは、授業の中での個々の活動に対してその都度なされ、その見通しに対する振り返りは学生自身で行っているものの、本実践で行う振り返りは、見通し通りにできたというような振り返りではない。

本実践においては、全15回の授業を通して、三つの方法で振り返りを行う。一つめは、毎回の授業ごとの振り返りである。授業の最後にテーマに沿って数行のレポートを書く。その内容について、次の授業で紹介したり、質問や誤解があれば説明したりし、出席確認にも使用する。二つめは、受講生が指定された「白ファイル」に綴じためた資料や作品、メモなどを、「ポートフォリオ」につくりかえることによる振り返りである。この中には、1年次の教科の内容に関する科目である「図画工作」の資料や作品も一緒に入れて作成する。さらには、4年次の選択授業「教職実践演習」等資料も将来的には入り、各自でまとめることを想定している。三つめは、グループによる振り返りである。同じ目標を持つ学生がグループになり、これまでとこれからについて考える機会となる。授業の中では適宜自分の学びを振り返る機会を設けている。（表1の網掛け部分）次に、この三つの振り返りの実践について、具体的な内容と成果を述べていく。

3 毎時間の振り返りの実践と成果

3. 1 「授業レポート」の概要

講義が多い大学の授業の中で、制作やグループでの鑑賞活動等の演習を行う本授業は、学生が集中し取り組み、盛り上がりもする。しかし、「楽しかった」「面白かった」「大変だった」だけで終わってしまっただけでは意味がない。また、「楽しくつくるだけで、なにが身についたのか？」という疑問を投げかけてくる学生もいた。そこで、演習を通して、何を思ったか、感じたか、ということを意識させることを目的に授業の最後に、数行のレポートを書くことにしている。（写真1、2）



写真1 「授業レポート」に記述する学生

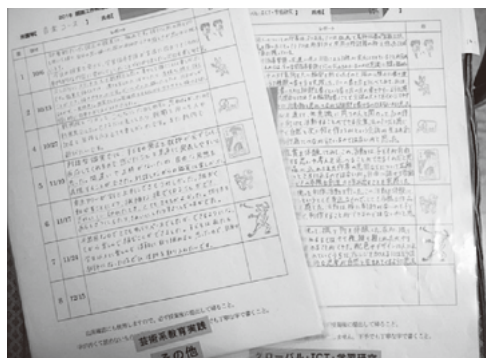


写真2 毎時間の「授業レポート」

市川伸一は、アクティブラーニングが目指すところは、「問題発見・解決のできる学習者の育成である」とし、これが日常的な学習の様々な場面で展開される際に大切にしたいこととして、「見通しや振り返りを行いながら「自分ごと」として学ぶという「主体性」と、他人との関わり合いを通じて学ぶ「協調性」をあげている²⁾。振り返りを通して、誰のためでもなく自分が、どのように感じ、変化し、成長したかを意識できるよう、自己内対話のきっかけとなるように促すことがここでの振り返りの目的である。従って、レポートでは、授業の最後にその時間の活動で意識させたいこと、例えば「ハサミを使って」「グループで鑑賞をしてみよう」などのテーマをあげ、それに応じて学生は気がついたことや考えたことを5分程度でまとめている。こちらが、提示するテーマ（振り返りのための問い）はとても簡単なものであるが、それに応えるために、活動の中での体験に照らし合わせたり、自らの感覚や感性に意識を巡らせたりしながら、学生は自分が知っていること、思っていたことなどの既知の事柄についてもう一度問う機会となることを期待している。レポートは、毎時間回収し、担当教員が内容を確認し、皆で共有したい意見や多かった意見などを次の授業で紹介する。また、出席等の確認にも使用している。

3. 2 「授業レポート」による振り返りの成果と課題

「授業レポート」では、ボールペンでのスケッチについて次のような記述が見られた。（「授業レポート」から原文のまま引用）「ボールペンだと一発勝負なので緊張するのもあって、小さくなってしまった」「単調ではあるが、油の強い線がいいと思った」「鉛筆のほうがあたたかみのある絵だなと感じました。ボールペンはくっきり見やすいけれどその分マンガと重なって“イラスト!!”という印象を受けました」「ボールペンで描くとその絵は硬い印象を与え、鉛筆で描くと絵は「軟らかい」印象を与える」など、道具の違いによって、行為や作品が異なることやイメージの違いなどに気がついている様子が見られた。

「新聞紙だけでこれだけの時間活動できると思いませんでした」「単純にハサミを使うのは楽しいと感じました」「自分で考えて工夫しながらつくれるのがおもしろかった」「最初は何をしていいかわからなかったけど気が付いたら夢中になっている自分がいておどろきました」「作りたいものをどのようにしたら作ることができるかなど楽しむ活動だけではなく、考える表現活動でもあることがわかりました」など、体験をしたことで、造形活動の魅力やその本質に気が付いている姿も見られた。

また、ハサミで切ってもものをつくることについて、「切りやすい、切りにくい素材がある」「切るときはそのものを動かすと切りやすい」などの細かな技法に関するだけでなく、「何かを作る時には余分なものを切り落として作っていくところがとても面白いと思った」など、造形活動の原理について言及する学生も見られた。

「みんなからいろいろな意見を聞くうちに、自分の意見が違う方に行って、いろいろな視点で絵を見ることができました」「一つの絵なのに、人によって様々な思ったことが出てきて発想が豊かな話し合いになったと感じました」「自分の考えを話して、「なるほど」と言ってもらえるのが嬉しかった」など、他者と一緒に活動することの意義を感じている学生も見られた。

他にも、「(造形あそびについて) 立ってやるのとではイメージも変わってより自由に楽しく活動できるということにも気がつけました」「『長くしてみよう』など課題を設定することでいろいろな活動になりうるといった」など、具体的な指導（教師の働きかけ）につながるような気づきも見られた。

「授業レポート」では、道具や方法、場や一緒に活動する友だち等についての細かな気づきが見られた。学生は、教科の指導法（の授業）と聞くと、単純に、指導の技術や評価方法を習得することに気が向きがちである。しかし、それ以前に図画工作科における学びがどのようなものであるかを考えさせることが重要である。「レポート」の記述からは、自らの体験を通して気がついたことを記述し振り返ることで、図画工作における表現や鑑賞での学びを「自分ごと」として見つめている学生の様子を見ることができた。今後も続けながら、すべての学生にとって十分な振り返りとなるよう検討していく。

また、次の授業時に前回のレポートの内容にふれる時間を設け、授業内容について補足説明や、学生の理解に誤りがあるような記述が見られれば解説を行った。このことで、回を重ねるごとに質問や疑問、意見を記入してくる学生が増え、数行のレポートではあるが、教員が学生の理解を確認するのに役立っている。

4 「ポートフォリオ」を用いた振り返りの実践と成果

4. 1 「ポートフォリオ」の概要

以上で述べた毎時間の「授業レポート」とともに、毎回の授業でワークシートや資料を配布しており、スケッチや切り紙作品と一緒に「白ファイル」に綴じておくように指示している。これらを使って、9回目の授業では、二つめの振り返りとしてポートフォリオの作成を行った。ここでの大きな目的は、一つは、自己評価と自分自身の変化を確

認すること、もう一つは、評価法の一つとして内容と方法を学ぶことである。「図工の評価は難しい。わからない。」
「先生の好み」などと考えている学生も少なくない。しかし、学校教育であるならば、評価は資料に基づき、客観的なエビデンスに基づいた評価が求められる。評価方法のひとつ、あるいはその資料としてもここでポートフォリオを取り上げた。

ここでのポートフォリオは、西岡加奈恵によるポートフォリオの六原則³⁾を参考に作成している。まず、ポートフォリオによる学習の主体は学生であることから、授業の1回目のオリエンテーションで、指定の「白ファイル」の購入や、資料の収集、活動を記録に残すこと等の説明を行い、学生が納得して資料集めに主体的に取り組めるよう促した。また、収集する具体的な作品は、完成品だけでなく、資料や設計図、下書き、参考資料、メモ等も含まれること、形に残らない活動の過程や作品の途中経過は写真に撮るなどして記録を残すこと、「白ファイル」にこれらのものを各自で綴じておくことを指導した。実際は、授業内でスマートフォンのカメラ等で自分や友達の作品や制作風景や撮影する学生の様子が見られたが、その数は少なかった。

また、長期的に自らの成長を振り返ることができるよう、ここで制作するポートフォリオには、1年次の「図画工作」の授業資料も一緒に入れる。そのため、「図画工作」の授業では、一人ひとりに「白ファイル」とほぼ同じ大きさの「スケッチブック」を用意し、そこにスケッチをしたり、メモを取ったり、直接作品や資料を貼ったりするよう指示し、2年後のこの授業まで大切に保管するよう指導している。そして、このスケッチブックもポートフォリオ作成の授業の際に持参させている。

この段階での「白ファイル」と「スケッチブック」は、「日常的に2穴ファイルや紙挟みに資料をためておく」という状態で、いわば「ワーキング・ポートフォリオ⁴⁾」である。従って、9回目の授業では、この「ワーキング・ポートフォリオ」の中身を確認し、長期的に保存する資料や作品を精査して選び取り、目的に合わせて並べ直して「パーマネント・ポートフォリオ」につくりかえることで、自身の学びの軌跡を振り返る活動を行った。

はじめに、教員の指示により、図画工作科の指導要領の内容に合うように、「絵・立体・工作」「造形あそび」「鑑賞」「指導案」の四つの「見出し」を作り(写真3)、各自でそれに合わせて資料を取捨選択していく。このとき、綴じ貯めた資料をどのように分類するかは学生自身に任せている。そのため、紙を用いた造形活動を「絵・立体・工作」に分類する学生もいれば、「造形遊び」に分類している学生もいるというように、学生ごとに分類の仕方が少しずつ異なっている。分類のための「見出し」は始めに示した四つを基本としているが、自分でわかりやすいよう増やしても構わないことにしている。

授業で配布する資料やワークシートは、ノートや感想などを記述できる欄を設けていることから、授業内だけでなく空き時間を使って各自のペースで学習を進めている様子(写真4)が確認できる。また、授業以外で関連する個人的な資料、例えば、美術館のチケットや美術コースでの他の授業資料なども、必要であれば綴じるように指導していることから、出来上がったものは学生によって少しずつ異なり、それぞれの学びの過程や今後の課題が現れたものとなっている。

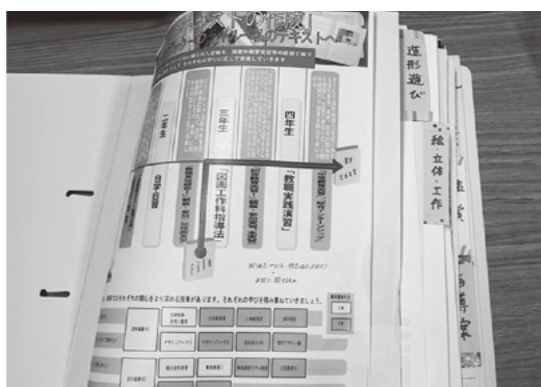


写真3 ポートフォリオ（見出しで分類）

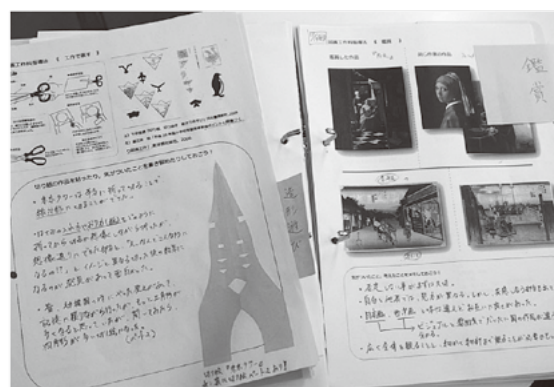


写真4 ポートフォリオ（記述済のワークシート）

4. 2 ポートフォリオによる振り返りの成果と課題

成果と課題について、西岡加奈恵の述べる四つの意義⁵⁾に照らして見ていく。

①教師が学生の学習実態を具体的、継続的に把握できる。

系統的に整理分類されたポートフォリオを確認することで、学生が教科全体を理解しているのかを読み取ることが可能となる。「作ることを通して自分を表現することの楽しさやそういった過程で友達と関わっていくということの

重要さを知りました」「図工は、ただ作品を作るだけではなく、自分で考えながら作っていくのが楽しいのだという風に考えるようになりました」など、図画工作科の本質に迫る記述がみられ、授業全体を通して伝えたいことが学生に伝わっているという手応えを感じた。また、「授業レポート」や収集した資料とその中身の充実から、分野や領域ごとの個別の理解の度合いについても確認することができ、改善すべき点を確認できた。しかし、学生数が多いこともあり、授業時間内でポートフォリオを介してやり取りするのは難しい。授業終盤（13回目の授業）のポートフォリオの提出の際に、教員からコメントや確認印を残すことで、教員が目を通してることが伝わるような工夫をしているが、ポートフォリオの原則である、学生と教員が「共同作業」で行っているというには不十分であり、今後は方法について検討する必要がある。

②学生自身にとっても学習の実態を自覚する機会となる。

ポートフォリオ作成した後の「授業レポート」では、「一つ一つの活動を振り返ると、新しい技法や忘れていたことなどを思いだし、それなりに力を付けてきたと思います」「鑑賞は楽しい、面白いと感じられるようになったのは大きな成長だと思う」など、授業の回数を重ねる、それを振り返ったことで自らの成長に気がついている様子が見られた。また、「1年生の時は、活動することを楽しみ、新しい知識を得ること重視だったけれど、3年生になって授業を受ける中で、ただ自分が楽しむだけではなく、実際に体験することを通じて子どもたちならどうするかということを置かえて考えることができるようになりました」など、受け身の姿勢から指導者を目指す「自分ごと」として授業に取り組む気持へと、意識が変化の様子が読み取れる記述も見られた。「ポートフォリオに分けることで、図工の授業をいろいろな観点で学んでいることが分かった（略）しかし技法や工夫という点がまだ苦手なのでもう少し頑張りたい」「図工で自分自身が何かを作る、描くといったことをする技能を身につけることができた」と1～3年の作品を見て感じた。（略）実践する経験が皆無なので、そこをこれから経験していきたい」などのように、自身の学習の実態を自覚し、教師になる上で自分に足りないもの、そのために必要なことについて言及している記述も見られた。これらから、ポートフォリオの作成が、学生自身が学びの軌跡や能力を確認し自らの課題を把握するとともに、図画工作科の学びやその意義について考える機会になっているともいえるだろう。

③自己評価力の育成

ポートフォリオの作成の中で、教員と子ども（学生）が評価のつき合わせ（検討会）を行うことで、子どもが適切な評価基準に基づいて自己評価を行うことができるようになる。この授業では、受講学生数が多いこともあり、教員と学生の検討会はできていない。その対応策として、グループワークで図画工作科を指導するために必要な資質や能力、つまり、この授業の目的について考える機会を設けている。活動の詳細については次章で述べるが、内容や方法についてはさらに検討が必要である。

④授業評価と説明責任

ポートフォリオによって、教員が学生の学習活動と自らの教育活動を評価することが可能になるとともに、「どのような学習をもたらしたいか」という点から授業を構想でき授業目標を明確化することができる。実際に、授業態度からはうかがえなかった学生の学びに向かう姿がポートフォリオから伺えることもあったが、十分とは言えない。一方、学習の具体的な姿を記録し見せることが、説明責任を果たす一つの方法でもある。評価の際に効果的に活用していくことも考慮し、学生の学びの姿が一層伺えるような内容となるようポートフォリオを精査していく必要がある。

以上、成果について四つの観点から述べてきたが、全体を通して浮かび上がってきた課題もある。例えば、ポートフォリオによる評価は長期的で継続性があることが求められるため、本授業後にも学生の自己課題としてポートフォリオ作成を継続できるよう指導するにはどのような方法があるのか、教員と学生が共に振り返る機会を設けることなども検討したい。

また、ここでのポートフォリオは、総合的に評価するための道具であり、作成の過程を通して、学生の学習に対する自己評価を促し、教師も学生の学習活動と自らの教育活動を評価することで、その目的が達成される。また、ポートフォリオを介して、授業担当教員間で学生の学びの過程を共有化し検討を繰り返すことで、カリキュラムの見直しへとつながることができる。本来ならば、学生と「図画工作」「図画工作科指導法」にかかわる教員、つまり、本学の美術コースの教員全員との間でポートフォリオを行き来させながら一緒に作りあげることが理想であるが、現実的に難しい。今後は、中心となる教員がポートフォリオを用いた指導・評価を継続していくとともに、全教員が何らかの形でポートフォリオにかかわり、それが学生にフィードバックされるよう改善していく必要があるだろう。

5 グループワークによる振り返りでの成果

5. 1 グループワークの内容と具体的方法

学生が自己を振り返り、自己の学びを評価する際に、それが独りよがりにならないよう、評価基準について確認したりすり合わせたりする機会が必要となってくる。その一助とするために、本授業の三つめの振り返りとして、受講学生同士でそれぞれの学びの成果や課題について話し合うグループワークを行なった。次に具体的な方法について述べていく。

三つめの振り返りは、グループによるKJ法を使ったグループワークである。専修・コースが異なる学生同士でグループが構成されるように、7～9名の10班に分けてグループワークを行った。一回目の活動、二回目の活動ともに付箋と「どこでもシート」⁶⁾（以下シート）を1枚ずつ用いたグループワークを行い、その後、各自のレポートによる振り返りを行うという形であった。このグループの話し合いで提示した問いかけの内容は、次期学習指導要領改訂で目指される、育成すべき三つの能力（「何を知っているか、何ができるか」（個別の知識、技能）、「知っていること・できることをどう使うか」（思考力、判断力、表現力）、「どのように社会・世界と関わりより良い人生を送るか」（学びに向かう力、人間性））に対応させている。これをもとに、図画工作科指導法で学んだ内容について振り返り、さらに今後のことへも目を向けることができるよう検討した。

実際に行った振り返りについて説明する。初めに、一人ひとりが図画工作科教育について、知っていること、わかったこと、できるようになったことを付箋に書き出した。（個別の知識の振り返り）この時、ポートフォリオと、ポートフォリオの作成の際に授業レポートで書いたものを参考に、授業内容など振り返りながら書く。次に、グループ内で順に発表しながらシートに貼っていく。（写真5）貼られた付箋をグルーピングしながら、文字や線を書き込んだりしていく。グループごとに全体に発表する。（写真6）（一回目のグループワーク）



写真5 グループ内での活動の様子



写真6 グループ内の話題を発表する様子

このグループワークで行われていたことは、自分の知識・技能の習得についての確認とともに、グループ内での共有である。自分が分かるようになったと書いた内容と同じものを他の人が書いていることや、逆に、自分はまだできると思わないことを他の人ができるようになったと書いている場合など、その意見交換の中で、個人の体験や授業での学びについて共有化が図られた。また、話し合う中で、図画工作科の本質を理解し、自分自身や子どもの造形活動の意味を考える機会となっていた。

次に、新しいシートに「わからないこと」「できなかったこと」「今後身につけていきたいこと」を各自付箋に書いた。それを第一番目と同様、グループ内で発表しながら貼り、貼られた付箋をグルーピングしながら、文字や線を書き加えていく。ここでは、さらに、自分たちの出した疑問や課題に答えを出し、書き込む。それをグループごとに全員に向けて発表する。（二回目のグループワーク）このグループワークにおいては、課題を確認し、残りの大学生生活をどのように過ごすか考えることが目的であった。

そして最後に、グループでの話し合いをもとに、各自レポートを作成した。それは、グループワークにおいて、ある程度グループとしての振り返りができた上で、最終的に自分はどうするのか、という振り返りに戻すためのものであった。レポートの内容は、①学んだことが、教員として（子どもたちのために）どのように生かすことができるか、②あなたが実習までに身につけるべきこと、やるべきことは何か、という2つであり、①では、自分の知識や技術を確認し、それらをどのように生かすかを考えることを目的とし、②では、教員として（社会人として）、活躍し続ける（世界と関わり続ける）ためにどのように行動するのがいいかを考えることを目指している。

5. 2 グループワークにおける振り返りの成果と課題

二回にわたるグループワークについて学生は、「自分が考えていたこととみんなが思っていたことが意外と同じようなことなので、感じることは同じなのだ」と単純に嬉しかった」「みんな同じような不安を抱えていることが分かり、少し力になった」など、同じように考えている人がたくさんいることや、そんなふうと考えている人がいたのか、ということなど、自分が感じていたことや考えていたことと友達が感じていたことや考えていたことについて共有することができ、多くの発見があったようである。また、「ホワイトボードに書き出すことで、今まで行ってきた活動がどんなことを学んだかを振り返ることができた」「自分だけでは気がついていなかったことを、グループでの話し合いを通して気付かせてもらえた」という感想は、自分一人では思い出せなかった内容を互いに出し合うことで共有し、深めることができたことについてのものであった。

さらに、付箋をグルーピングしたり、文字や記号を書きながら、図式化したりすることで、バラバラにあげられた内容の繋がりが理解でき、グループとしての形を作り上げることができたと思われる。「KJ法での話し合いは可視化されていることで、他の人の意見をすぐ把握できたり付け足したりして、自分の意見もさらに深めることができた」「視覚的に1年間の活動を振り返ることができ、自分の中で整理することができた」「様々な視点で考えることができてよかった。図工は特に、同じ活動であっても、皆、考えていることは異なったりしているようで、本当に多様なんだと気がつきました」というような感想がたくさんあった。

また、グループの話し合いを発表するということで、班ごとに違うことを考えていたことを確認し、全体として、さらに多様な内容を共有することができたと思われる。

ここで、二回のグループワークで出てきた具体的な内容について見ていくと、まず、第一番目のグループワークでは、「鉛筆1本で様々な表現ができることがわかった」「子どもの絵の発達がわかった」「切り方一つでいろいろな切り紙が作れた」など、学んだ知識や体験した材料や技法などについて挙げているものが多かった。その他では、「絵の上手下手が大事なことはないことがわかった」とか、「身近ないろいろな材料で授業を作れることがわかった」とか、自らの教師としての資質・能力の観点からとらえている付箋もわずかに見られた。(写真7、8)

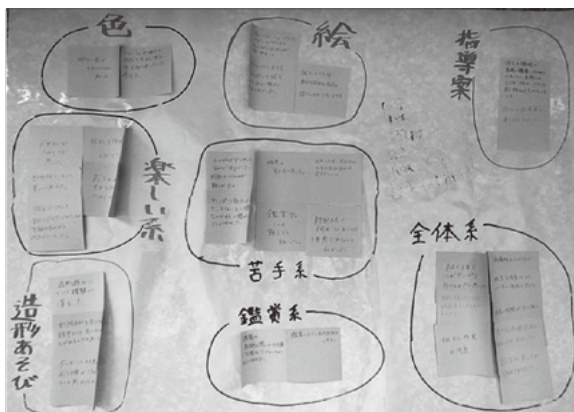


写真7 一回目のグループワーク例①

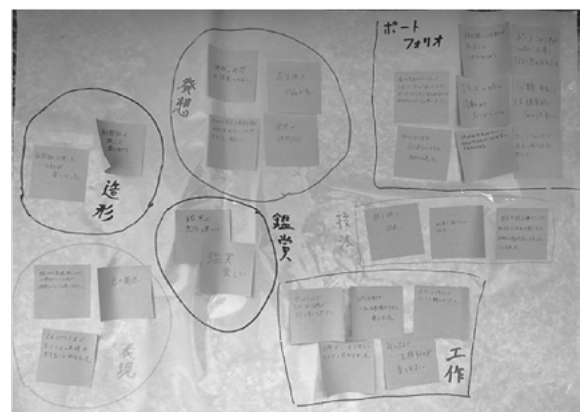


写真8 一回目のグループワーク例②

次に二回目のグループワークでは、「わからないこと」「できなかったこと」「今後身に付けていきたいこと」をあげ、グルーピングしながら、解決策も考えるということを行った。二度目のグループワークとなるため、やり取りも活発になり、グループによってできあがったシートは1番目のグループワークのものより、多様な形になった。特に、わからない、できないということに関しては、「周りの悩みを共有し、語り合う活動は、他者から意見をもらって見方・考え方を広げられるだけでなく、自分の頭の中を整理することができた」というような感想が多く見られた。しかし、グループワークの中で、わからなかったことやできなかったことに対する有効な解決策や今後の在り方を考えられたかということ、そこまで個々人の考えがなかったように読み取れ、今後の課題となった。

このような二回のグループワークを通した振り返りについて、纏められた内容から考察できることは、付箋のグルーピングについて、一回目のグループワークと二回目のグループワークで観点の違うグルーピングが行われていたことである。最初の「知っていること、わかったこと、できるようになったこと」を書き出したものは、図画工作科の領域ごとに、例えば、絵や立体に表す領域として、「鉛筆の濃さの違いがわかった」「スプーンをうまくつくった」などを1つのグループにし、鑑賞の領域に「対話型鑑賞の方法がわかった」などを集め、グルーピングしていった形であり、自分たちの体験や授業での内容が基になっている。グルーピングしたもの同士の関係に意識はいておら

ず、いくつかのかたまりができていているという形である。これは、授業の内容が、学習指導要領に示されている領域「絵や立体に表す活動」、「造形遊びをする活動」、・・・というような領域に分けて構成されていたからであり、その中で多くの気づきを互いに確認していたと考えられる。

それに対して、二回目のグループワークでは、ほとんどのグループが、「授業」、「指導案」、「子ども」、・・・のようなグルーピングを行い、たとえば、「教材・教具」の中に、「〇〇がうまく作れなかった」というような付箋を貼ったような形になっていた。個々の活動から共通する要素を取り出し、教師の立場で図画工作科について考えていることがわかる。そして、グルーピングしたものを線で結んだり矢印をつけたり、互いの関係性にまで意識が広がっていたことが、大きな特徴となっている。(写真9, 10)

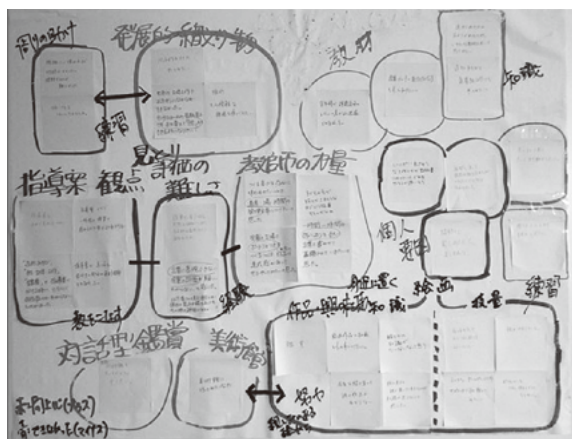


写真9 二回目のグループワーク例①

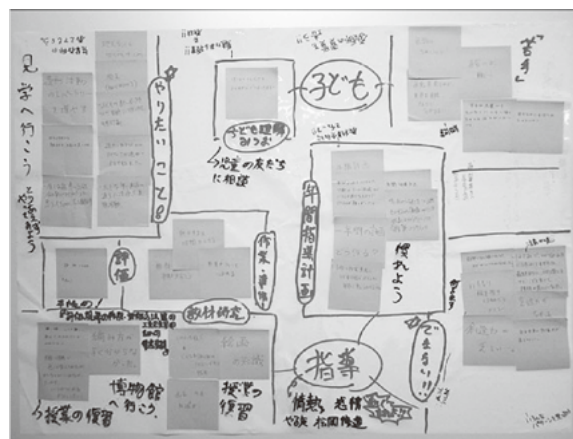


写真10 二回目のグループワーク例②

このグループワークのあとに、最終的な一人ひとりの振り返りを行い、レポートにまとめた。そのレポートに記述されたものは、学生一人ひとりの内容が多岐にわたっており、纏めることや特徴などを読み取ることができなかったが、3年生の前期の段階で子どもたちや学校全体のことを考えたり、今後のことを考えたりすることは難しかったかと思われる。授業者としては、教育実習に向けて学んでいって欲しいという願いや教師としてどう学んでいくか考えて欲しいという意図があったわけであるが、書かれていたものは「評価や授業づくりについて学びたい。」といった抽象的な内容が多く、この授業で学んだことを自分が教師として生きていく上でどのように受け止めるかというような学びに向かう力や人間性の観点からの記述はあまりなかった。

グループワークとの関わりについては、「今後身につけたいことに、技術的なことを挙げた人がいたが、小学校の先生になるには、ある程度の図画工作の技術が必要なのかな・・・？楽しさを伝えられればいいのではないかな・・・。と思った」「周囲の人は、大変向上心があり、子どもたちのために懸命に考えていると感じた。私も見習って学んでいきたい」というように、グループワークの内容に関して自分の考えを記述しているものも見られた。

6 まとめ

学生自身が毎時間の授業内容をもとに感じたこと、考えたことを書き、振り返ることで、次第に美術に対する意識が変化し、図画工作科教育が何を目指し、子どもたちにどのような資質・能力を育てようとしているのか、自分の体験を通して理解していったと考えられる。そして、その体験を言葉で表現することで、身体と言葉が一体となって、身についていったと思われる。また、前時に書いた自分の体験、考え等を次の時間に見ることで、本時の振り返りともつながり、授業が連続した思考過程として捉えられていった。

次に、白ファイルに貯めておいた資料や作品を、整理、分類し、ポートフォリオを作成することで、1年次からの美術に関わる自らの歩みを振り返ることになったと思われる。そして、その各自纏めたポートフォリオをもとに、グループワークによる振り返りをすることが、さらに、今まで自分が学んできたことの振り返りと、他の人がどのような学びをしてきたのか、知る機会となった。

この三つの振り返りの関係について考察すると、毎時間の振り返りは、今までの自分の体験や考えていたことと、授業で学んだことを照らし合わせ、特に実際に体験しながら自分自身を見つめる振り返りである。その振り返りの毎時間の積み重ねの上に、学部1年次からためているものをもとにポートフォリオを作成するということにより、ファイルにためていたもの（1年次に制作した作品や訪れた美術館や展覧会のパンフレットや授業で使った資料など）を

通して、もう一度大学に入ってから振り返りをすることができた。その個人個人の振り返りをグループで共有し、視覚化、図式化することで、今まで学生として学んだ知識や習得した技能・能力が、さらに教員の資質・能力と照らし合わせてどうなのか、考える機会になったと思われる。グループワークによる振り返りの前に、各自の振り返りがなされていることは当たり前のことであるが、それを毎時間の文字による振り返りと、ポートフォリオという形の両方から行ったことが、充実した振り返りにつながるものだと考えられる。

また、一連の振り返りは、学生自身のためだけでなく、授業者である我々教員にとって意味深いものであることは言うまでも無い。一人ひとりの振り返りに対して指導・助言を与えることができること、授業についての評価ができること、そして、学生の変容を評価できることは、大きな成果であった。

7 おわりに

学生が大学の図画工作科指導法の授業で学んだことを基に、図画工作科を教える立場を意識して、いかに今後学んでいくことができるか、そのための方策として振り返りという方法を授業に取り込み、実践を行った。三つの振り返りを体験することで、学生は自身で学んだことや自分自身の体験を振り返り、さらにポートフォリオを通して自身の大学での学びを振り返り、そして他者とのコミュニケーションを通して自分自身を振り返る、という繰り返しを行いながら、自分の学びの軌跡を確認し、自己の変容をとらえていったものと思われる。この多様な方法で自分を見つめ直した体験は、将来なるであろう教員としての資質・能力を高めていくことにつながるものと考えられる。

学生への知識の伝達で終わりがちな指導法の授業において、振り返りの機会を授業に位置づけながら、授業以外での学びを積極的に行う学生に育ってもらいたいという願いから生まれた実践であるが、教育実習後にもう一度授業の振り返りを行うことで、さらに明らかになることも出てくるであろう。今後、研究を発展させ、より充実した指導法の授業を目指していきたい。

引用及び参考文献

- 1) 松尾大介, 五十嵐史帆, 安部泰, 伊藤将和, 「初等教育における造形表現力育成のための基礎研究」, 2010, 大学美術教育学会, ポスター発表 他
- 2) 市川伸一, 『初等教育資料 No.939』, 「目指すべきアクティブ・ラーニングとは」, 東洋館出版社, 2016.4, p.21
- 3) 西岡加名恵, 『教科と総合に生かすポートフォリオ評価法新たな評価基準の創設に向けて』, 図書文化, 2003, p.53
- 4) 同上, p.60
- 5) 同上, p.54
- 6) ホワイトボード用のペンで書くことができ、壁に静電気で貼り付くビニールのシート。サイズは1枚60cm×80cm。

A Consideration of Reflections on Learning in Arts and Crafts Instructor Training

Shiho IKARASHI* · Yasuko ABE*

ABSTRACT

The primary teaching methods of each subject are important parts of a teacher training course not only as a part of teaching practice, but also for use in actual teaching after student teachers become fully qualified.

However, it is difficult to provide adequate instruction given the number of teaching hours and the scope of the lessons. The primary teaching methods aim to enable students to learn the basic content in class and then study it independently.

In arts and crafts courses, it is especially necessary for student teachers to develop skills in each medium and technique themselves in order to teach them. Major differences in readiness among student teachers make such learning difficult.

In this study, the students learning teaching methods for arts and crafts classes studied how these classes should be taught and used this knowledge to shape how they themselves aim to become teachers, by reflecting on their personal experiences.

Specifically, three periods of reflection are incorporated into the actual lessons. Through this reflection, students change their understanding of art, leading to awareness of their roles as teachers. In addition, a retrospective exercise led to changes in the students' lifestyles. As a result, students' consciousness changed, nurturing their awareness and attitudes as teachers.

KEY WORDS

Arts and Crafts 図画工作, teacher training courses 教員養成課程, reflection 振り返り

* Music, Art, and Physical Education